

# クリプキ以降の指示の概念の批判的検討

仲宗根勝仁

(大阪大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC)

分析哲学の黎明期より、指示の概念は哲学の中心的な問題であり続け、様々な分析哲学者が様々な立場から論じてきた。フレーゲは意味の構成要素に指示と意義があると主張し、意味の言語哲学的考察を行った。ラッセルは固有名の多くは偽装された記述であり、指示対象が見知りによって与えられる固有名こそ真の固有名だと主張した。クワインやデヴィドソンは指示の不確定性を主張し、指示に依存しない意味論の構築を試みた。そしてクリプキの『名指しと必然性』以降、カプランやソームズらの理論的研究もあり、固有名や指標詞などの意味はその指示対象であるという直接指示説が隆盛し、指示を基本的概念とみなし意味論を構築する動きが英米圏で一つの潮流をなしている。

指示の概念が特にクリプキ以降重要視されてきたのは、少なくとも次の三つの点による。

- ① **【意味】** 指示は言葉の意味の構成要素である。「私」や「あなた」などの指標詞や「あれ」や「これ」などの指示詞、固有名などの意味を説明するには、それが表す対象にも言及する必要がある。
- ② **【形而上学】** ある言葉の指示対象はその言葉の使用者の信念に依存せずに決定されている。そのおかげで私たちは本質や外的対象についての思考が可能となる。
- ③ **【心】** 指示についての現象を説明するには、事物に向けられた心的状態、すなわち志向性(intentionality)が重要な役割を担う。指示の概念は、心を脳だけで考えるのではなく環境との関係をも考慮に入れることを要求する。

本発表の目的は、①を批判に考察することで、クリプキ以降の指示論を問い直すことである。特に、指示の概念は果たして意味論的概念とみなすべきなのかどうかについて近年の言語哲学の研究を手掛かりに議論する。結論を先取りするなら、指示の概念はそれ単独で哲学的に興味深いとしても、意味論には必ずしも必要ではない。最後に、本発表での議論が指示についての他の哲学的見解とどのような関係にあるのかについて考察する。

## 発表タイトル 『専門知の多様性と社会』

(応募区分 パネルディスカッション)

代表者 垣本 伊守幹 (かきもと いすみ)

文学研究科 文化形態論専攻 現代思想文化学専門分野 博士前期課程2年

共同発表者 中村 文彦 (なかむら ふみひこ)

文学研究科 文化形態論専攻 現代思想文化学専門分野 博士後期課程1年

### 要旨

知識社会と言われる現代社会において、専門的判断は社会的意思決定の基盤としての役割を期待されている。一方で、専門分化が進行することで、慣習や規範を異にする専門家集団どうしの対立は顕在化し、社会に様々なコンフリクトをもたらしている。このような今日の状況を読み解くことが、本発表の目指すところである。

本発表は以下の構成をとる。まず、2名の発表者がそれぞれ異なる事例を取り上げ、専門知の多様性に光を当てる。そして、後半のパネルディスカッションおよびフロアに対する応答のなかで、かかる専門知の多様な在り方が、今日の社会においてどのような問題を提起しているのかを探求する。

#### 垣本 発表タイトル：「戦後公害史にみる<法と科学>のインターフェイス」

公害訴訟に代表される現代型科学裁判は、法曹と科学者(人文・社会学者を含む)という、異なる専門家集団の共働を要請する。

4大公害期の代表的事例を取り上げ、判例法理の形成において両者が果たした役割について、科学技術社会論(STS)の諸アプローチを援用しつつ、学際的に検討する。

#### 中村 発表タイトル：「心理学から考える『再現性』問題」

近年、心理学における再現性(再現可能性)の低さが注目されている。この危機的状況は、裏を返せば、なぜある科学分野における再現性が低くなるのか、そもそも再現性とは何なのかを考え直す良い機会でもある。

心理学の再現性について論じた複数の論文を参考に、心理学特有の規範や慣習を検討し、その上で科学一般に対して何が提案できるかを議論する。